

東国から来た僧（ワキ）が、都を見るために旅をしてきます。

ワキ・・・僧侶



六条河原の院に到着したので、しばらくここを見物しようと、思い立ちます。



そこへ、一人の老人（前シテ）がやってきました。

前シテ・・・
汐汲みの老人



面・・・三光尉

この辺の方ですか



はい、ここは汐汲みです

海辺でもないのに汐汲みとは何かの間違ひではないのですか？

ここは融の大臣が陸奥の塩釜の風景を都にうつされた河原の院ですぞ

この塩釜の浦人なのにとりして汐汲みと思つて下さらないのです

ではあれは離島でしょうか

そつです

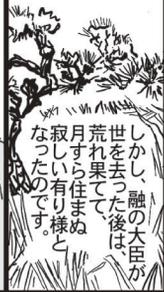
おや、月が出て来ましたな

古い詩の世界に帰ったかのようです

老人は、融の大臣が河原の院を造園した譚れを語ります。



嵯峨天皇の頃、融の大臣は陸奥の干賀の塩釜のすばらしい眺めを聞き、この河原の院にその風景を移して難波の御津の浜から毎日汐を汲んで運ばせ、塩を焼かせていたのでした。



しかし、融の大臣が世を去つた後は、荒れ果てて月すら住まぬ寂しい有り様となつたのです。

僧に尋ねられ、老人はここから見られる名所を教えます。

音羽山、清閑寺、今熊野、伏見稲荷、藤の森、深草、木幡山、伏見野、竹田、淀、鳥羽、大原、松尾、嵐山・・・

それから老人は汐を汲み、左右の田子に月が映るかに見えたのですが、潮煙に紛れてしましました。



間狂言の清水寺門前の者が現れ、僧の尋ねにに応じて融の大臣のことを語り、僧に供養を勧めます。

夢に旅寝すると、僧に融の大臣（後シテ）が現れます。

面・・・中将



後シテ・・・融の大臣

大臣は、昔のように月を眺めながら、舞に興じます。

また、水中の魚は水面の三日月を釣り針と疑い

雲の上の鳥は、弓の影かと驚くけれど、月そのものは下ることほなく、水が空に昇ることなく、全てはありのままであると言います。

そして月が西へ傾ぎ、明け方も近くなると、大臣は月の都へ入るかのようについで、消えてゆくのでした。

